中野重治全集

第十二

野重治全集

第十二卷

筑摩書房版

中野重治全集第十二巻

昭和三十七年八月三十日　発行
定価　六五〇円

著者　中野重治

発行者　東京都千代田区神田小川町二ノ八　古田晁

印刷者　東京都板橋区志村町五　柳川太郎

発行所　東京都千代田区神田小川町二ノ八　筑摩書房
電話　東京(291)七六五一(代表)
振替　東京一六五七六八
印刷　凸版印刷株式会社

1962, Shigeharu Nakano (Printed in Japan)

目次

聞書きを取れ……三
ある時期の註釈……四
停滞期にいるものの回想……七
久米正雄の「日本米州論」……一六
素人以前の考え……二一
外国との関係ということ……二七
ヒルスカさんの手紙……三六
「ちつぼけなアヴァンチュール」のことで牧瀬氏に答える……三九
悔おおかりしわが身かな……五〇
二つの問題……五一

茅盾さんへ……五五
学生とその国の文学……六四
身は半纏のボロッぱし……六五
カイライ放送　除名　平林たい子……七〇
教師としての室生犀星……七八
日本におけるプロレタリア的・革命的文学の流れについて……八一
わたしの信条……八九
『人民文学』と江馬の言葉……九九
宮本百合子の研究……一〇七
沢野久雄の「道化師」について……一〇九
死のあとで……一一一
死人に口なしか……一一五
宮本百合子の読み方について……一一九
短歌雑感……一二三
共産主義と文学……一三〇
言葉のプリオリテートについて……一四一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

人のよさの記憶……………………一四四
故人の思い出……………………一四八
記憶のために……………………一五〇
石川達三と平林たい子とに……………………一五七
嘘と文学と日共臨中……………………一五九
「現代民衆詩選」について……………………一六八
作家における常識の問題……………………一七〇
文学と政治……………………一八八
芥川龍之介……………………一九七
『室生犀星詩集』について……………………二〇三
ゴーリキー・魯迅十五周年記念の意義……………………二〇八
黒島伝治と細菌戦……………………二一〇
魯迅について……………………二一三
心持ちとして……………………二一七
彼女の新しくもたらしたものについて……………………二二二
『藝術論』について……………………二三五

宮本百合子の評論について……二四〇
わたしはこんなことを望む……二四七
いいことだ……二四九
「くれなゐ」について……二五六
折口信夫さんについて……二六三
権威の問題……二六七
詩のこと　文学史のこと……二七一
『原爆詩集』について……二八三
『祖国の砂』について……二八八
サークル誌めぐり……二九〇
詩と言葉……三三三
宮本百合子の文学について……三三七
こつてりとした美……三四二
河上さんの詩……三四五
文学と社会・政治記事……三四七
なかなか書けぬ次第……三五一

小熊秀雄の詩……三五三
真実一本槍……三五九
『私の東京地図・くれなゐ』について……三六五
峠三吉のこと……三六八
堀の死を聞いて……三七〇
『小林多喜二作品集』について……三七一
一人の普通人と『万葉集』……三七八
今日の感想……三八三
読者という関係……三八九
ふたしかな記憶……三九四
藝術の心……四〇〇
文学サークルの二つの問題……四一〇
旧刊案内……四三六
告別式に……四五一
未整理のままに……四五二
一つの側面……四五四

堀辰雄のこと……四五六
かなしい遺産……四六〇
折口さんの印象……四六八
記録がわり……四七一
二つのこと……四七七
解題（且原純夫）……四八四
作者あとがき……四九七

中野重治全集　第十二巻

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

聞書きを取れ

人の話を聞いてそれを書きとつたものがつまり聞書きだ。何々事件というようなことで百姓が引つぱられて、検事とか何とかいう人がきて調べをして調べ書きをつくる。あれもひろい意味では聞書きのうちにはいるかも知れぬが、わたしのいうのはそんなのではなくて、村には年寄りがいる、また物知りがいる、そういう人の話を聞いて、今のうちに、むかしのことの聞書きをつくれということだ。

徳川のおわりから明治のはじめにかけては、日本いたるところの村、町にいろいろ一揆などがあつた。何々騒動というようなものもあつた。よほど大きなものは記録になつて残つているが、小さいのや特別の条件のあるものなどは、ほとんど残つていない。しかしそういう一揆に自分も出たというような人が、まだ方々に生き残つている。自分は出なかつたが、自分の兄が出たというような人も生き残つている。

また方々の村には、楪茂左衛門のような人の話が残つていて、能登の奥の方などでは、大名に直訴したある百姓の祭が今も続いている。千葉では、今でもやはり村のおばあさんたちが、「宗吾さま」の祭にはハダシで電車に乗つておまいりにくる。こういうことがたくさんある。

たくさんあるけれども、楪茂左衛門のこと、佐倉宗吾のことを、みんな正確に知つているわけではない。何やら騒動という名は聞いていても、実際どんなだつたかはわからなくなつているのもある。それでわたしは、むかしのことを知つている村の年寄りたちに、そういういろいろのことを聞いて正確な記

録を今のうちにつくつておく必要があると思う。これは若いものがやらなければならぬ。十七、八の人でもやれると思う。おばあさんなんかは物おぼえのいいもので、五十年も六十年も前のことを、あの石田縞の織り賃は何銭何厘だつたなどと言える人がちよいちよいある。田仕事、畑仕事のやり方にしろ、ちよんまげを切つたときの騒ぎにしろ、明治政府の三島県令のような男のために強制労働をさせられたときのことにしろ、何でもいいから聞書きを大量にとつてほしい。

むかしのことを知れば、今の村つくりのための大きな土台の一つができる。香典帳や宗門人別帳なども今のうちにちやんと整理する必要がある。こういうことは、今年夏の新日本文学会の中央委員会でも問題になつたが、案外なところに宝がかくれているのだから、のこさず集めてほしいと思う。『新日本文学』では、そういうものの発表場所としても役立ちたいと思つているが、国中の人々の骨折りを願いたい。

（十月二十一日）

ある時期の註釈

わたしが田中英光に会つたのは三度である。正確ではないが多分まちがつてはいないだろう。とにかく三度だけはおぼえている。一度は、それが最初になるが、新日本文学会の大会が渋谷の公会堂であつたときで、そのときは宮本百合子もまだ外に出ることができた。鹿地亘も病気になるまえで出席していた。その大会の会場ではじめて彼に会つた。

二度目はそのあくる日で、これは大会で扱つた問題について分科会のようなものがあり、中野かどこかのある人の家の二階で十人くらいの席で彼に会つた。どうしてその家を借りることになつたのかわたしは知らないが、そのころは集まる場所もなくてそうしたのだつたろう。ただしわたしはその家の持ち主を知つていて、これは会とは別に以前からの知合いだつた。沖縄の人で、ながくサイパンにいて苦労したが、敗戦のまえにすつかり白髪になつて軍艦でおくりかえされ、それから沖縄にかえつて行つた。今は沖縄にいる。とにかくそこの二階で会つた。

三度目は四谷警察署の地下室で会つた。そのときの印象では、警察署長は田中英光にわりによくしていたのではなかつたかと思う。何か新聞種にしようとして押しかける人々などから、ある程度彼をかばつていた、少なくともかばおうとしていたとわたしには見えた。そのときの様子では、英光自身、なんとかして薬の影響から抜けたいと考えているようにわたしには見えた。

そういうわけで、三度しか会つていないが一種の独断がわたしにあつて、彼の全面とはいわぬまでも一面はわたしが知つているという気がしている。いま言つた、最初に会つて話したころから彼が共産党を抜けたすぐあとまでのくらいの時期、この時期に彼の示した一面をわたしが知つていると思うのである。

最初に彼に会つた大会の時のことは、彼の小説「地下室から」に出ているといつていい。そのあくる日の会のことも出ていたかと思う。そしてその出方に、彼の人のよさと弱気とがそのままに出ていてわたしの記憶にある。

大会では最初彼の出ていることをわたしは知らなかつた。討論に出てきて彼が元気な意見を出したのでわたしは初めてそれと知つた。彼の意見は一種の行過ぎで、文学を政治に卑俗な意味でも従属させてしまえという主張だつた。

ただしそのときも明らかだつたのは、誰か別の人が同じことを言い張るのとはちがつて、彼の主張が、

彼に文学のことがわかつていることから来ているらしいことだつた。仮りに政治青年と文学青年という言葉をつかうとすれば、彼は文学青年でありすぎるために、かえつて彼のなかのその文学青年を圧迫しようとして力んでいた。しかも彼は、そういうことすべてを、誰かが、あるいは大会が、ある程度のみこんでくれるだろうというやや甘えた考えをも同時に持つていたようだつた。これはあくる日の会合の談論にもあらわれていた。そしてこのすべてが、小説「地下室から」では逆にしつらえられている。そこに彼の弱気があつた。あれをあんなふうに逆にする必要が、小説のなかの話としてどうしてあつたかよく解せないが、要するに、静岡の方での働き方によほど無理があつたのではないかと思う。

大会のあとで、つまり最初の日に、わたしは彼に『アカハタ』に短いものを書いてくれるように頼んだ。彼は喜んで書くといつてくれた。そしてまもなくそれを送つてくれた。それは『アカハタ』にのつて読者の評判もわるくなかつた。

しかしあとで考えると、そのころの彼はよほど悪戦苦闘しているところだつたらしい。そしてそういうことを一人で片をつけようとしていたのらしい。そういうことを、もつとあけつぴろげにする勇気と才覚とずうずうしさとがあつたのだつたらよかつたろうと思う。

彼の死んだあと、わたしはいろいろの人が彼に同情を寄せているのを読んだ。わたしも同情を寄せた一人である。ただわたしは右のような記憶と解釈との上で同情を寄せた。

もし彼が、自分のなかのやや古風な——藝術至上主義みたような文学青年をば、政治第一をふりかざすことで無理に殺すような便宜主義の道をとらないで、それを生かして行く肚になれたのだつたらば、その方がずつと苦しくはあるが、そしてわたしは、とくに二日目の会合でそれを彼に言つたのでもあつたが、彼は生きることができたのだつたろうと思う。二日目の話にしても、彼にわたしの話がわからなかつたはずはない。その点彼は、やはり苦しい方の道をえらばなかつた、やさしい方の道をえらんだ。

苦しい道をえらべば生きられるところを、やさしい道へ逃げたために死なねばならなかつたというところにこの時期の彼の問題があり、彼の作を読むための一つの――すべてのとはいわぬが――カギがあると思う。いずれわたしは、このことについて別に書きたいと思つている。

（二月八日）

停滞期にいるものの回想

――私の詩作について――

わたしはこのところ詩を書いていない。一昨年二つ書いたのを除けば、一九四〇年以来まる十年書いていないのだから、詩作の経験を語るというのはおこがましい話になる。停滞期にあるのだろうが、停滞期といつてもずいぶん長い停滞期で、書けなくなつたというのと上べでちがわぬような停滞期である。小説家などには書けない時期がくると、ベースボール（？）との連想でスランプにおちるというふうにいつているが――このごろはそんな言葉づかいもなくなつたかも知れぬ。――わたしの落ちているのはスランプなどいう言葉ではあらわせぬものかも知れぬと思う。そういうスランプにおちていて詩作の経験を語ることは、いまいましいことでもあり道理に合わぬ話にもなるが、一方わたしは新しく詩を書こうともしているから、詩作についてとにかく語ることはできると思う。

わたしは詩を学問としては学ばなかつたから、語るとなれば経験的に語ることになるが、詩を書こうと思い立つた最初は、何といつても個人として目ざめようとした少年期の、その目ざめようとすること

の一つのあらわれだつたと思う。個人としての目ざめというようなことを自覚していたはずもないが、客観的にはそういうことになり、要するに一つの精神的春機発動というようなものであつた。

いつがその最初だつたかということはあきらかでないが、だれにしろそうであるように、自分で一行二行書いてみようとする前には、詩とかあたらしい詩人の仕事とかについて知らずしらずのうちにある知識ができていた。わたしの場合のそれは全くごちやごちやとしたもので、西条八十とか北原白秋とかいう人の詩もあれば、土井晩翠とか有本芳水、竹久夢二とかいう人の詩もあつた。藤村の詩なども断片的に知つていた。『万葉集』というようなものも断片的に知つていた。そんな具合だつたところへ、何かの時に室生犀星の詩を知つたことが、まず、わたしにとつては決定的な詩への機縁となつた。

室生犀星の詩にたいする評価は、すでにきまつているというふうにはまだ言えぬようにみえる。わたしの見たものでは、これを高く評価する風と低く評価する風との二つがあつて、低く評価しようとする人々の意見が全くわからぬではないが、日本の詩、日本の詩の発展というところからいつても、また人間の生活にたいする詩のはたらきかけの機能という点からいつても、低く評価しようとする人々にはどこかに勘ちがいがあるように思う。しかしそれは学問的な話になるからここでは触れなくていい。わたし自身のこととしていえば、ある特殊な人からは低く評価されるようなそういう点、詩をじかに人生の問題としてつかまえてきていた点、そこが、室生犀星の詩のわたしをつかまえたところであつた。

詩が少年のわたしをつかまえるのに、室生犀星の詩のそういう点でなくて、何か、三木露風の『廃園』とか、西条八十の『白孔雀』(?)とかいうような点でだつたとすれば、結局なにか詩のようなものを書いてみることにはなつたにしろ、今のような詩人にはわたしはならなかつただろうと思う。北原白秋とか西条八十とかいう人たちの詩には、ああいう世界にはいれる人々だけを詩としてつかむという性質があつたが、室生犀星の詩には、ただ大きくなつて、少年になり青年になつて行く人間をそのまま

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com